

チャペル随想

経済学部教授 大西晴樹（元学長、前学院長）

へボン館南側6階の研究室から眺めるチャペルは、周辺の木立に囲まれ森の中に建つ。このチャペル、献堂式以来100年の歳月を数え、学院の現代史を物語る証人なのである。毎年、4月の入学式は、希望に胸膨らませる新入生を、3月の卒業式には、新しく巣立っていく卒業生を、時々の結婚式には、幸せに包まれた新郎新婦をイエス・キリストの御名における賛美と祝福と祈りをもって受け入れ、送り出してきた。だが、チャペルは晴れやかな姿だけを物語るのではない。かの15年戦争の間、ここから、生徒たちが出征し、戦死にせよ、戦病死にせよ、生命を奪われた生徒たちのための「学院戦没学生慰霊祭」がこのチャペルで執り行われたことも紛れもない事実である。

私にとって、日本敗戦50周年にあたる1995年6月10日（土曜日）のチャペルは感動的でした。当時の中山弘正学院長がこのチャペルで、「明治学院の戦争責任・戦後責任告白」をイエス・キリストの御名において表明し、学院長として明治学院の戦争責任を謝罪したからである。私は最前列にいたが、当初は心なしか不安で、讃美歌が弱々しく聞こえた。だが、学院長の告白が終わり、校歌が斉唱されるころには、多くの学生生徒を含む500人の会衆が力強く、その歌声を響かせていたのを今でも忘れることができない。

明治学院の後を追いかけるように、青山学院、立教、北星学園、西南学院といったキリスト教学校が、キリスト教学校と戦争というテーマに取り組んだり、戦争責任告白を表明したりするようになったのである。